

イザヤ書五十三章を視座にして
——遠藤周作の『深い河』論——

李 英 和*

1. はじめに

遠藤周作の『深い河』（講談社、一九九三年）は、インド旅行に参加する四人の日本人（磯辺、美津子、沼田、木口）と、ヨーロッパの修道院を追われ、イスラエルのガリラヤ修道院に移り、さらに神父になってインドにたどり着いている大津、これら五人の人物におこる出来事を話の中心に据えて展開される小説作品である。全十三章で構成されている。

『深い河』は、一見、断片的なエピソードを集積したかのような印象を受ける。つまり、偶然にツアー旅行に参加した人々のエピソードが綴られるという形で物語が展開し、五人の登場人物それぞれにまつわる話が、オムニバス形式で、一章、三章、四章、五章、十章に配されているからである。しかしながら、大津を除いた四人の登場人物は、それぞれ何かを求めてインドへ旅立っており、その旅においてそれぞれ大きな存在を感じるという点で共通している。つまり、それぞれの登場人物の体験がある一つの主題に向かって収斂しているのである。その主題とは、つまり、作者・遠藤自身の言葉でいえば、「〈失われた愛を求めて〉迷う」ということであり、「その愛は人間の魂が捜している愛」⁽¹⁾である。

さて、本稿ではこのような作品の主題と『深い河』作中で何回も登場するイザヤ書五十三章の言葉がどのように関わっているのか、それを考えてみようとする。イザヤ書五十三章の言葉は、十一章と十三章の章題としても用いられており、『深い河』作品全体を貫くものになっていると考えられるからである。イザヤ書五十三章が意味するものは何であるのか、また美津子はなぜイザヤ書五十三章の言葉に始終こだわるのか、これらを中心に作品を読み解いていくことで、作者・遠藤がイザヤ書を用いて語ろうとする「神」について考えてみようとする。

さらに、『深い河』には「ピエロ」という言葉が至るところで用いられているが、これも作品の主題と密接に関わっている言葉と考えられる。美津子に「ピエロ」と呼ばれる大津を中心に『深い河』における道化のコンセプトについても考察を試みてみたい。

2. いか「神」を語るか

上述したように、『深い河』にはイザヤ書五十三章の同じ言葉が何箇所にも引用されている。しかもこのイザヤ書五十三章の言葉は始終美津子に付きまとう言葉として機能し、神は何であるかについて語るものとして機能していると考えられるが、その言葉が語る神の概念とはいかなるものであるのかをみてみたい。

**The theory of the <Deep River> by Endo Shusaku
— Oriented towards the Isaiah Ch. 53 —**

Lee younghwa*

<Deep River> by Endo is consisted of 13 chapters. It can be seen as a simple combination of short stories of the travelers in India at first glance as the five main characters in the book are dealt with in the whole chapters in the form of omnibus.

But, four of them except Otsu began to look for something respectively and felt certain existence in common. In other words, the experiences of the four travelers approach one common theme.

This paper focused on the co-relationship between the theme and the Isaiah Ch. 53 which was cited several times. In addition, the relationship between the word 'Piero' which is shown in this book several times and the theme of this book was also speculated at the same time.

* 城西国際大学研究員

『深い河』でイザヤ書五十三章の言葉がはじめて出てくるのは「三章 美津子の場合」においてである。美津子がはじめてイザヤ書五十三章の言葉を読んだのは大学時代であった。美津子は神を信じている大津に神を棄てるとボーイ・フレンドにしてあげると約束するが、彼女は大津が自分との約束を守るかどうかを確認するために入ったチャペルで、偶然イザヤ書五十三章の言葉を読むことになる。

彼は醜く、威厳もない、みじめで、みすぼらしい
 人は彼を蔑み、見すてた
 忌み嫌われる者のように、彼は手で顔を覆って人々に侮られる
 まことに彼は我々の病を負い
 我々の悲しみを担った。(二〇〇頁)

しかし、美津子は、この言葉にまったく関心を持たず、実感も感じない。むしろ「大津はどうしてこんな実感もない言葉を読んだり信じたりできるのだろうか」(二〇〇頁)と疑問に思うだけである。

次に同じ言葉が出てくる箇所は、「九章 河」である。大津が神父になってインドで働いているということを聞いた美津子が、インドへ旅立ち、そこで「ガンジス河」と「女神チャンームンダー」を見物した後の箇所である。後述することになるが、大津は美津子に棄てられた後、神父になるためフランスの修道院に入る。しかし、そこで異端視され修道院に移され、さらにまた他の修道院に入る。そして、今は神父になってインドへ来ているわけである。彼女は「ハンセン氏病にただれ、毒蛇にからまれ、痩せ、垂れた乳房から子供たちに乳を飲ませている」女神チャンームンダーの姿を思い出すと同時に、突然、大学時代にチャペルで読んだことがあるイザヤ書五十三章の言葉を思い出す。そこには、右に引用した内容とまったく同じ言葉が引用されている。その時、美津子は「(わたしは、なぜその人を探すのだろう)」と自分に問いかける。さらに「その人の上に女神チャンームンダーの像が重なり、その人の上にリヨンで見た大津のみすぼらしいしろ姿がかぶさる」(三一〇頁)のであった。

三回目に同じ言葉が出てくる箇所は、物語の終りのところである。すなわち、美津子がインドで大津と再会し、大津の働いているガンジス河のガートへ行った時である。その時、美津子は、「至るところで憎しみが拡がり、至るところで血が流れ、至るところで戦いがあ」(三三八頁)る世界の中で「大津の信じる玉ねぎの愛などは無力でみじめだった。玉ねぎ

が今、生きていたとして、この憎しみの世界には何の役にもたたない」(三三九頁)と思う。その時、美津子はイザヤ書五十三章の言葉をまた思い出す。この言葉を思い出した美津子は「滑稽な大津。滑稽な玉ねぎ」のことを思い、火葬場のあたりに大津の姿を探す。美津子は「あの男を馬鹿にしつづけながら、なぜ関心を持ち、それを求めるのだろう」(三三九頁)と自分に問いかける。

このようにイザヤ書五十三章の言葉は、『深い河』の三箇所引用されている。さらに、イザヤ書五十三章の一部の引用は、『深い河』の至るところにみられる。大学時代、大津に神を棄てさせることに快楽を覚えていた美津子は、大津が自分に没頭すると満足感は消えてしまい、やがて大津を棄てることになる。その後、美津子は大津を思い出すたびに十字架にかけられた「男」を思い浮かべるのであった。例えば、大学を卒業して結婚を決めた美津子は、結婚披露宴の席で、友人から大津が神父になるためフランスのリヨンの神学校に入ったということを聞く。その時、美津子は「両手を広げ、痩せた無力なあの男は、大津をいつの間にかとり戻していた」(二〇八頁)と思う。また新婚旅行でフランスへ行った美津子は、夫と別行動をして、大津がいるリヨンに寄り、大津と再会することになる。その時、彼女は大津がなぜ神学校に入ることになったのかと訊ねる。美津子の質問に対して大津は、「あなたから棄てられたからこそ一、ぼくは……人間から棄てられたあの人の苦しみが……少しはわかったんです」と答える。さらに大津は「おいで、私はお前と同じように捨てられた。だから私だけは決して、お前を棄てない、という声を」聞いたという。大津の言葉を聞いた美津子は、その時、「彼は醜く、威厳もない。みじめで、みすぼらしい」と書かれていた聖書の言葉をまた思い出すのであった。

以上、ストーリーを追ってイザヤ書五十三章の言葉が出てくる箇所を整理してきた。

では、『深い河』の中に散りばめられているイザヤ書五十三章の言葉が意味するものは何であるのか。その言葉から何を読み取ることができるのだろうか。

イザヤ書は、紀元前七〇〇年頃に書かれた。イエスが生まれる七〇〇年前に、イザヤはメシヤがどのような死に方をするのか、そしてそれは何の為なのかを克明に描いた。イザヤ書は全部で六十六章もある。イザヤ書は三つに区分されて、それぞれ違う時代に預言者として働いた、また神の言葉を語った預言者の言葉が集められている。その中で四十章から五十五章は「第二イザヤ」と呼ばれ、特にその中の五十三章は、旧約聖書の中で最も有名なものの一つで、キリストの受難の場面を克明に預言している箇所である。五十二章の十三節から五十三章の十二節までは「苦難の僕」と称される。しかし、メシヤの受ける屈辱の奥深さが記述される前、冒頭においてすでにメシヤの最終的な勝利と栄光を確信させ

られる。イザヤ書五十二章十三節において「見よ。私のしもべは栄える。彼は高められ、上げられ、非常に高くなる」という言葉に注目してみると、メシヤの苦難は、ただの悲劇に終わる受難でないことに気づかされる。『岩波キリスト教辞典』(二〇〇二年)〈イザヤ書〉の項によれば、第二イザヤ書は、罪の赦しと捕囚からの解放を預言し、特に五十三章において〈苦難の僕〉の贖罪による救済を告知するとされる。美津子は、このような意味を持っている聖書の箇所をしばしば思い浮かべ、しかも十字架にかけられたイエス像に向かって彼女自ら話しかけるのであった。ストーリーをフィードバックしてみると、美津子と大津の物語が始まる最初、大津を誘惑しようと思った美津子は神を信じてもいないのに、自ら「神さま、あの人をあなたから奪ってみましょうか」(二〇〇頁)と話しかける。そして、大津が来るかどうかを確認するためチャペルで待ち伏せしていた美津子は、十字架に向けて「来ないわよ、あの方は。彼からあなたは棄てられるのよ」と話しかける。大津に会って以来、美津子は幾度も十字架の「瘦せた男」に話をかけるのだ。大津が日曜日教会へ行かないことを聞いたとき、「(あなたは無力よ。わたくしの勝ちよ。彼はあなたを棄てたでしょ。棄てて私の部屋に来たわ)」(二〇三頁)と自ら話しかける場面がある。結局、美津子は大津を棄てることになるが、その後も美津子は大津を思い出すたびに、十字架にかけられた「男」を思い浮かべ、何回も神に話しかける。

十字架上での死に特別な位置を与えたのは、特に使徒パウロであった。しかし、この十字架の福音は、新約聖書および原始キリスト教の文書全体にゆきわたっている。イザヤ書五十三章の〈苦難の僕〉についての預言は、十字架上でのイエスのことだと考えられた⁽²⁾。使徒言行録八章二六節から三九節にはイザヤの預言は、イエスについての預言であることが記されており⁽³⁾、またマタイの福音八章一七節にはイザヤ書の預言が取り上げられ、具体的にイエスのことを称していることが明確にされている。マタイの福音一六節に「イエスは言葉で悪霊を追い出し、病人を皆いやされた」という箇所があるが、それに続く箇所に「それは、預言者イザヤを通して言われていたことが実現するためであった」とあり、「彼はわたしたちの思いを負い、わたしたちの病を担った」⁽⁴⁾と記されている。つまり、イザヤ書五十三章に表わされている受難は、決して受難として終わるものでないことに気づかれるわけだ。

それでは、なぜ美津子は、イザヤ書五十三章の言葉をしばしば思い浮かべ、十字架の「瘦せた男」に幾度も話をかけるのだろうか。無関心であったならば話をかけることはないだろう。美津子の口癖というか本音というか、彼女はしばしば自分に向けて「(一体、あなたは何がほしいの)」という言葉を何度も発する。さらに彼女は「自分が他の女性たちと

ちがって、誰かを本気で愛することができないように思った。砂地のように乾ききって、枯濁した女。愛が燃えつきた女」(二一一頁)であると思っている。美津子は自分が離婚した理由を「わたしは人を真に愛することはできぬ。一度も、誰をも愛したことがない。そういう人間がどうしてこの世に自己の存在を主張しうるだろうか」という、福田恆存の『ホレイショ日記』に共感したからであったと、大津に宛てた手紙の中で書いている。そういう彼女が、無関心でいられないものがある。それがまさに大津のことであった。「美津子の心の奥は大津を否定しながら無関心ではいられない。なぜか知らぬがゴム消しで消しても消えないの」(二六〇頁)であった。

美津子は大津に会いにインドへ旅立つが、インドで彼女の心に突きささったのは、「ガンジス河」と「女神チャンムンダー」であった。上述したように美津子には、「十字架にかけられた男」と「女神チャームンダー」、また大津が一体となって重なるのであった。美津子は大津を探するため大津が働いているガートへ行ってみたり、大津が属している教会を訪ねたり、また大津が出入りしているという淫売屋へ行ってみるが、会えない。大津を探すのをやめようと思った彼女は、自分が今まで欲しがっていたことが何であるかを考えてみる。「彼女は自分もXを欲しがっていることだけは漠然と感じた。自分を充たしてくれるにちがいないXを。だが彼女にはそのXが何なのか、理解できない」(三一四頁)のであった。美津子が欲しがっているのは、何であったのか。それは、沼田の質問に対する美津子の答えからうかがうことができる。沼田は美津子に「どうしてその神父をしつこく探すんですか」(三一三頁)と聞くが、その質問に対して美津子は「あなたが九官鳥をお求めになると同じですわ」と返答する。沼田にとって九官鳥は、沼田が苦しみに陥っている時、自分の苦しみを分かち合ってくれる存在であった。このことを考え合わせると、美津子にとって大津がいかなる存在であるのか——自分の苦しみを分かち合ってくれる存在——がわかる。

美津子は「あの男を馬鹿にしつづけながら、なぜ関心を持ち、それを求めるのだろうか」(三三九頁)と自分に問いかけるのだが、それは沼田が九官鳥を求める心情と同じであることは上述した通りである。しかし美津子は、大津が三條の身代わりになって担架で運ばれていくのを見送りながら、大津の生き様を「無力」であったと思う。ところが、最後にマザー・テレサの「死を待つ人の家」のシスターたちが老婆の世話をするのを見て、「玉ねぎは、昔々に亡くなったが、彼は他の人間のなかに転生した。二千年ちかい歳月の後も、今の修道女たちのなかに転生し、大津のなかに転生した」(三四五頁)と思う。このよう

に思う美津子において、大津の生き様は決して無力であったとは言い切れない。美津子が始終思い浮かべたイザヤ書五十三章で描写されていたあの「男」も、無力であった。しかし、無力に見えたが決して無力ではなかったことは、後の弟子たちが語っている言葉が証明している。

イエスの弟子たちは、きわめて早い時期に次のような結論に達した。すなわち、イエスは死ぬためにその生涯をおくられたのであり、彼の死は生の中断などではなくて、その究極的目的であったのだ。(ルカ 二十四章一三節)

「玉ねぎ」がシスターの中に、また大津の中に転生したと思う美津子の内面に密かに「玉ねぎ」の死の意味がわかってきたと捉えてよいだろう。このように考えると、イザヤ書五十三章の言葉は、美津子に神は何であるかを知らせる言葉として機能していたといえよう。すなわち、無力に見えるけれど、決して無力で終わらない神、それがイザヤ書五十三章を借りて遠藤が語っている神の概念であったと考える。

『深い河』には、無力を表わすもう一つの言葉がある。「ピエロ」である。以下はこの「ピエロ」という言葉が、『深い河』においてどういう機能を果たしているかをみてみる。

3. 道化のコンセプト

『深い河』には道化師がしばしば登場する。しかしそれはこっけいな芸を演じることを生業とする道化師のことではない。「ピエロ」という渾名をもつ人物であり、あるいは動物のことである。大津、沼田が飼っている犀鳥、「五章 木口の場合」に出てくるガストン、これらの人々と動物は、いずれも「ピエロ」と呼ばれ、道化としてみられたり、道化の役割を演じたりするのである。

『深い河』において「ピエロ」がもつ役割は大きい。ではこの道化——「ピエロ」は、実際、作品の中でどのように機能しているのだろうか。ここでは、『深い河』にあらわれた道化——「ピエロ」の要素を明らかにし、また道化がもつ意味を読み解いていく。

まず、美津子に「ピエロ」と呼ばれる大津のことを考えてみよう。大津が美津子に「ピエロ」と呼ばれたのは、彼が道化役を演じたからではなく、結果的に演じるはめに陥ったからだといえよう。大学時代、大津は同じ学校の学生たちに「見ただけでからかいたくなるタイプのやつ」とみられ、「砂糖漬けにしてほしい」と思われる存在であった。その理

由は「いつも笑顔をつくって皆に好かれようとしてい」るからである。また彼の恰好も学生たちの嘲笑の種になった。ほとんどの学生が制服を着ない時代なのに、彼だけは「野暮な学生服」を着ているからであった。大津は、美津子をはじめ彼女の後輩の男の学生たちのからかい対象になる。しかし何よりも、大津がカトリックの洗礼を受けたことだけでも、嫌悪感を感じさせる対象であった。美津子は後輩にけしかけられて、大津を誘惑するが、彼が信じる神を棄てさせたことに満足し、やがて彼を棄てるわけである。そのような大津を美津子は、「ピエロ」という渾名で記憶している。美津子が大津のことを思い出し、過去を顧みしたのは、インド旅行の説明会が終わり帰宅途中でのことであった。上述したように、その後、大津は神父になるためフランスの神学校へ入り、そのことを聞いた美津子は新婚旅行でフランスへ行った際に、リヨンによって彼と再会したのだ。そしてまた、美津子は、大津が神父になってインドで働いているという情報を得てインドへ旅立ったのだ。大津はインドで行き倒れの人を助けたり、死にかかった人たちを背負って火葬場までつれていったりする仕事をしている。美津子は大津の行為を「無力」と思い、しかも「滑稽な大津。滑稽な玉ねぎ」と断定する。物語の始まりのところで、美津子が大津のことを「ピエロ」だと思って以来、再び大津のことを「ピエロ」という言葉を使って表わすのは、物語の最後のところである。大津が三條の身代わりになって遺族からリンチされた時だ。大津の「血まみれになった丸い顔は文字通りピエロそっくり」(三四一頁)であった。担架に乗せられて運ばれていく大津を見送る美津子の心情をみてみよう。

「本当に馬鹿よ。あんな玉ねぎのために一生を棒にふって。あなたが玉ねぎの真似をしたからって、この憎しみとエゴイズムしかない世のなかが変わる筈はないじゃないの。あなたはあっちこっちで追い出され、揚句の果て、首を折って、死人の担架で運ばれて。あなたは結局は無力だったじゃないの」(三四二頁)

美津子は「玉ねぎ」について行こうとした大津の生き様を「無力」であったといいつつ、美津子自身、そういう大津に無関心ではいられなかった。しかも、美津子がインドで一生懸命大津を探そうとしたのも、その無力である大津に、九官鳥を求める沼田と同じ心情があったからだ。いい換えれば、美津子は最初から大津に「ピエロ」という渾名をつけ、彼を軽蔑し、彼の無力をからかったりするが、後に大津のその無力が、単純な悲劇に終わる無力ではないことを理解したと考える。これは美津子の大津に対する印象が、いささか変化をみせるところから知ることができる。美津子の大津に対する印象は、「普通の人から

見ると馬鹿な生き方をしてきたけど……ここに来て、わたくしにはなんだか馬鹿でないように見えてき」(二九九頁) だと、大津に対する評価が変わっていく。さらに美津子は、物語の最後にマザー・テレサのシスターたちの行為をみて、シスターたちの中にも大津の中にも「玉ねぎの愛」が転生したことを語っていることから、今まで美津子が考えていた大津の無力の変容が予想できる。

一方、美津子から「ピエロ」という渾名をつけられた大津の立場から考えてみると、カトリックの神父である大津は、カトリック教会で通用している秩序を拒否する存在である。彼はフランスのリヨンの神学校で、神父になるには不適格だとされ修練院に移される。だが、そこでも彼の考えは異端視され、叙階されなくなり他の修道院に移る。その後、語り手の何の説明もないまま、神父になってインドで働いている。大津が、神学校の先生や先輩たちに自分の考えを語るとき、それは単に語っているのではなく、訴えているかのように読み取れる。つまり大津は、二千年も変ることなくヨーロッパ中心であったキリスト教が、変わらなければならないと告知したのであった。インドでの大津の行為も、普通のカトリックの神父のそれから逸脱している。先述のように、彼はヒンズー教徒の服装をして、死んだ人を背負って火葬場まで運ぶ仕事をしている。そのために、そこのカトリック教会からも追放されたと推測されるわけだが、にも関わらず大津は、自分がカトリックの神父であることを自認する。ここから、大津の道化的なところを読み取る可能性が開けてくるのだ。ポーランドの哲学者L・コラコフスキーは、道化師はアウトサイダーであり続けねばならぬといい、道化師の哲学は、疑問の余地なく見えるものを、いつの時代でも、疑わしいと告発する哲学である⁽⁵⁾ といっている。コラコフスキーの言葉を借りていうならば、大津の行為こそ道化師の役を演じているようにみて取れる。キリストを道化として捉えようとする試みは、すでに中世に存在していた。道化としてのキリストの象徴は、イザヤ書をはじめ、聖書の至るところにみられる。アメリカの神学者ハーヴェー・コックス⁽⁶⁾ は、サーカスの道化とキリストの像を重ねたジョルジュ・ルオーから話を説き起こし⁽⁷⁾、キリストがサーカスの道化として現れたことを神学的に重大な事件としてとりあげる⁽⁸⁾。そういえば、大津に「ピエロ」という渾名を与えたのは、彼に道化の役割を担わせるための意図であったことがうかがえるのだ。しかし、このような道化役を演じる大津にしても、最初は無力に見えるけれど、決して敗北することはない。そこに、大津の道化性があるのである。

次に、「ピエロ」という渾名をつけられた犀鳥についてみてみる。沼田が自分の飼っている犀鳥に「ピエロ」という渾名を付けたのは、ルオーの画「ピエロ」に描かれたピエロ

の顔がこの犀鳥に似ているからであった。犀鳥は沼田にとって、連帯感を寄せる対象であり、心の交流を通わす唯一の対象であった。犀鳥を部屋で放し飼いにするようになった沼田は、妻が腹をたてると、イエスが当時のユダヤの司祭たちに迷惑で邪魔な存在であったように、犀鳥も妻にとって同じ存在であると思う。沼田が、犀鳥をイエスに喩えるのは重要である。沼田にとって犀鳥は、自分の「どうにもならぬ寂しさ」を癒してくれる存在であった。

このように、犀鳥が沼田の苦しみを分かち合ってくれる存在であったことを考えると、沼田にとって犀鳥は同伴者の役割をしてくれたことになる。そこに、動物を通して、同伴者イエスのイメージを捉えようとした作者の意図が読み取れる。

さてここで、ルオーの「ピエロ」画を考えてみる。沼田は犀鳥がルオーの描いた「ピエロ」に似ていることから、犀鳥に「ピエロ」という渾名を付けたといっていたが、その理由は、ただそれだけのことではなかった。

ルオーは早い時期から、道化師を描きはじめている。ルオーの一生の伴侶となったのは道化師である。ルオーは、一九〇二年頃から道化師を描きはじめ、半世紀の間描き続けていたといい、ルオーにとって道化師は、人間の代表というより、自分を含めた人間そのものであった⁽⁹⁾。遠藤は、ルオーが描いた道化師には、イエスの哀しみに通じる何かが必ずあるといい、また道化師は静にイエスに寄りつつあるといっている。さらにルオーが描いたイエスは、老いた道化師のようにあわれな人間たちの同伴者であるといい、いつも悲しい人間のそばにたたずんでおり、その人間の悲しみをわかち合っている存在であるにとらえる⁽¹⁰⁾。つまり、沼田が自分の飼っている犀鳥に「ピエロ」と渾名を付けたのは、ただ形が似ているからだけではなく、ルオーの「ピエロ」画のように、犀鳥に「同伴者」の姿を求める希求があったからであると思われる。

さらに、「ピエロ」という言葉が出てくるのは「五章 木口の場合」においてである。上述したように、そこに登場するガストンは、「ピエロ」の役を演じる人物である。なぜ、ガストンは「ピエロ」の役を演じる道化師としてみられたのか、それについて考えてみる。

木口がガストンの存在を知ったのは、戦友である塚田が入院していた病院においてであった。塚田が入院した経緯は次のようである。木口は太平洋戦争が終りに近づいた頃、ビルマ戦線から退却する時、マラリヤにやられ死にかかると、塚田の看病によって生き延びることができた。二人はビルマから帰還する。しかし彼らは、精神障害におちいり、社会生活や家庭生活にうまく適応できない。特に塚田は、その当時、死んでいる戦友の人肉を食べた記憶から逃れられなくて、過去を忘れようとして酒を飲みすぎ、やがて病に倒れ

た。外国人であるガストンは、塚田が入院している病院で、ボランティアの活動をしている。塚田の話によると、ガストンは「外人のくせに患者の尿器や便器でも嫌な顔ばせずに持っていきよる」(二四二頁)。また菓子を食べる時「十字を切る」仕草をするという。ガストンの様子は、次のように描写されている。

馬鹿にされたり、からかわれたりしてガストンが患者たちにわずかな慰めを与えているのを木口は感じた。雲間から洩れる弱々しい冬の陽ほどの慰め。それでもガストンは毎日、苦しむ多くの患者たちの一時の気晴らしになる。サーカスの道化師(ピエロ)の役をガストンはこの病院で演じている。(二四六頁)

木口はガストンを「ピエロ」の役を演じる道化とみている。「ピエロ」という言葉の内包する意味はいくつもあるが、ガストンは自ら人前で、滑稽な振る舞いをして笑いものになることによって、人々に慰めをあたえようとしているように思われる。自分の死を予感した塚田は、ガストンを呼び寄せ、「あんたのいう神は……本当におるとか」と聞いた後、自分が戦争の時、人肉を食べたことを告白する。塚田の話聞いたガストンは塚田を慰め、以後、彼は「毎日のように塚田の病室に来て、病人の手を自分の掌の間にはさみ、話しかけ、励ましていた」(二四九頁)。さらに「ベッドの横に彼を跪いたガストンの姿勢は折れ釘のようで、折れ釘は懸命に塚田の心の曲りに自分を重ねあわせ、塚田と共に苦しもうとしていた」(二四九頁)。木口は息を引きとった塚田の顔を見て、「ガストンが塚田の心からすべての苦しみを吸いとったため」と思う。後に木口は「戦友が人間がしてはならぬ怖ろしいことを犯し、自爆自棄のまま死にかけた時、あの人こそばにきてくれた」といい、「私の戦友にとっては、同じ巡礼に同行するもう一人のお遍路さんになってくれた」(三三一頁)とガストンを評価する。

以上、道化——「ピエロ」が果たしている役割を読み解いてみた。大津と犀鳥、またガストン、いずれにしても「ピエロ」という渾名が付けられている彼らの役割は、一緒にいてくれる存在であり、苦しみを分かち合ってくれる存在であることがわかった。その「ピエロ」の形象に、同伴者イエスのイメージが託されていることはいうまでもない。

ではなぜ、遠藤は道化のコンセプトを用いてイエスを語ろうとしたのか。それは時代の状況の中で、イエスの意味を問い直そうとしたからにほかならない。『深い河』において「ピエロ」と呼ばれたり、「ピエロ」を演じる存在と関わりをもった人たちは、皆神と無縁な人々であった。現代においてイエスに関わろうとするならば、我々自身の状況に対する関わり

を無視することはできない。現代の状況の中で、イエスと出会うということがありうるのだろうか。しかし、もしありうるとすれば、どのような出会いであろうか。以下では、それについて考えてみる。

4. 神はいかなるものなのか

美津子は、他の人の伝導を受けてイエスに関心をもったわけではない。彼女は自由な形で、自分から十字架のイエスに声をかけ、イエスとの交わりに導かれる。そして大津の生を追うことによって、次第にイエスへの関心は増していく。それがもっとも明らかになるのは、美津子が大津の死を目撃し、また「死を待つ家」のシスターたちの行動を眼にしてからだと思われる。

旅人であった美津子は、見知らぬシスターたちに「何のために、そんなことを、なさっているのですか」(三四四頁)と聞く。シスターたちは「それしか……この世界で信じられるものはありませんもの。わたしたちは」(三四四頁)と答える。しかし、物語の最後に、このシスターたちの行動を配置したのは意味深い。美津子は、病院で自分の介護ボランティア活動を、「愛の真似事」と称した。しかし、最終的に美津子は、自分の中に愛をみつけ出したとまではいえないが、大津とシスターたちの中に玉ねぎが転生したと思うことによって、玉ねぎの愛がいかなるものであるかは少し理解したかのように読み取れる。では美津子が、大津とシスターたちの中に転生したと考える「玉ねぎ」とは何であろうか。それについて、具体的に読み解いていくことにする。

美津子が「玉ねぎ」について初めて聞かされたのは、フランスのリヨンにおいてであった。上述したように、美津子は新婚旅行の時、わざわざ大津がいるリヨンへ行って彼と再会したのであった。その時、大津は自分がなぜ神学校に入ったか、また自分に声をかけてくれた神は何であるかを美津子に説明する。大津は、美津子に「神は存在というより、働きです。玉ねぎは愛の働く塊なんです」と真剣に説明したのだが、その後、大津の美津子に宛てた何通かの手紙の中で自分が信じる「玉ねぎ」のことについて語っていた。その一つを紹介しよう。

ヨーロッパの考え方、ヨーロッパの神学には馴染めなくなったぼくですが、一人ぼちの時、そばにぼくの苦しみを知りぬいている玉ねぎが微笑しておられるような気さえます。ちょうどエマオの旅人のそばを玉ねぎが歩かれた聖書の話のように、「さあ、

私がついている」と(二六二—二六三頁)

その後、ふたたび二人が玉ねぎについて語るようになったのは、インドにおいてであった。貧しい人々のためにインドで働いている大津に、「あなたはヒンズー教のバラモンじゃないのに……」という美津子の質問に対して、大津は次のように答える。

「玉ねぎがこの町に寄られたら、彼こそ行き倒れを背中に背負って火葬場に行かれたと思うんです。ちょうど生きている時、彼が十字架を背にのせて運んだように」(三一七頁)

大津が、美津子に玉ねぎのことを語った二箇所を引用しておいたが、では大津が語る「玉ねぎ」とはいかなるものであるのだろうか。また美津子は、大津に聞かされた「玉ねぎ」のことをいかに受け入れたのだろうか。最初引用した下線のところに注目したい。「エマオの旅人のそばを玉ねぎが歩かれた聖書の話」は、「ルカの福音書」の物語るイエスの復活の物語によるものである。イエスが十字架刑に処せられた後、三日経ってイエスの墓を訪れた女性たちは、イエスの遺体がなくなったことに気づく。その時、まばゆい衣を着たふたりの人は、彼女たちにイエスの復活を告げるのであった。その同じ日に、エルサレムからエマオという村へ行こうとしている二人の弟子が「話し合ったり、論じあったりしているうちに、イエスご自身が近づいて、彼らとともに道を歩いておられた。しかしふたりの目はさえぎられていて、イエスだとはわからなかった」(ルカ 二四章一五節一六)。T・S・エリオットの『荒地』には、この話を南極探検隊員が極度の疲労の中で視る、幻覚として物語る一節がある。

Who is the third who walks always beside you?

When I count, there are only you and I together

But when I look ahead up the white road

There is always another one walking beside you

いつも君の脇を歩いている三人目は、誰なんだ

僕が数えると、君と僕だけしかいない

けど目の前の白い道を見上げると

いつももう一人が君の脇を歩いているんだ

岩田靖夫は、T・S・エリオットの『荒地』のこの一節を挙げて、レヴィナス哲学の「逆説の二義性」を補強している。レヴィナスはアウシュビッツ体験に基づき、キリストの神を「敗者、貧者、世界の縁に放逐された被差別者に連帯する」という「逆説の二義性」の中に位置づける。さらに岩田靖夫は、この「君」に寄り添う「第三の人」を、レヴィナスの神観念と結びつける⁽¹¹⁾。『荒地』の幻覚の中にいる主人公には、エマオへ行く弟子と同じく、この第三の存在が誰であるかを知ることができなかった。彼らの目はさえぎられていた。しかし大津は、「エマオの旅人のそば」を一緒に歩かれた「第三の人」が誰であるかを知っており、しかも自分もその役を演じているのだ。「第三の人」、それはまさに彼が信じる「玉ねぎ」であった。いい換えれば、大津が信じる玉ねぎは「愛」そのものといえよう。なぜなら、大津は「この世の中心は愛で、玉ねぎは長い歴史のなかでそれだけをぼくたち人間に示したのだと思って」おり、「世界の中で、最も欠如しているのは愛であり、誰もが信じないのが愛であり、せせら笑われているのが愛であるから、このぼくぐらいはせめて玉ねぎの後を愚直について行きたい」(二六二頁)と思っているからである。すなわち、大津は「エマオの旅人のそば」を一緒に歩かれた「第三の人」についていこうとするのである。この「第三の人」と思わせるものが、遠藤の小説『死海のほとり』(一九七三年)にも出てくる。『死海のほとり』の「私」は、自分の中途半端な信仰にケリをつけるためにイスラエルに立ち寄り、「事実のイエス」を問いかけるうちにねずみの最後が知りたくなった。「ねずみ」と渾名されているコバルスキはポーランド人の修道士で、臆病で、貧弱で死をこわがっていた。彼はナチの収容所に入れられてからも巧妙にふるまって、死の恐怖から逃れようとした人物である。「私」に、「ねずみ」の最後をみとどけたキブツに働く医師から、以下の内容の手紙が届いた。

背広を着た独逸人が彼の左側に立って歩きだしました。うしろで私はじっとそれを見送っていました。コバルスキはよろめきながら温和しくついていきました。その時、私は一瞬——瞬ですが、彼の右側にもう一人の誰かが、彼と同じようによろめき、足を曳きずっているのをこの眼で見たのです。その人はコバルスキと同じようにみじめな囚人の服装をして、コバルスキと同じように尿を地面にたれながら歩いていました……(二〇二頁)

「私」はあのように弱く、それに弱い故にイエスの命じる愛を実行できないねずみのような人間ですら、イエスが見放さず、傍らに付き添っていたことを知ったのだ。「私」はねずみの最後を通して、イエスが「同伴者」として二千年前と変わらず、今も働いておられることを確認する。それを確認することによって、「私」はイスラエル旅行でイエスの復活の意味を微かに理解したのであった。「私」はその「誰か」が、今、自分にも付きまどっている存在であることを知る。

「付きまどうね、イエスは」(中略) 人間たちのそのなかに、あなたはおられ、私の人生を捕まえようとされている。私があるあなたを棄てようとした時でさえ、あなたは私を生涯、棄てようとされぬ。(二〇四頁)

ねずみの傍らにいた「もう一人の誰か」は「エマオの旅人のそば」を一緒に歩かれた「第三の人」と同じ存在であることはいままでのないだろう。しかもその「誰か」が、今、現実を生きていく「私」にも付きまどっているのを「私」は認めるのだ。

この「誰か」と類似するものが、『侍』(新潮社、一九八〇年)にも出てくる。『侍』の終りに近い場面で、侍が切支丹宗門に帰依した過去を問われ、お仕置の場所にむかうところである。そのとき、雪の庭に正座してうつむいていた下男の与蔵が、主人の侍にひきしぼるような声をあげて呼びかける。

「ここからは……あの方がお供なされます」突然、背後で与蔵の引きしぼるような声が聞えた。「ここからは……あの方が、お仕えなされます」侍はたちどまり、ふりかえって大きくなずいた。そして黒光りするつめたい廊下を、彼の旅の終りに向かって進んでいった。(四三二頁)

侍が旅の途中いくども目にしたイエスは、十字架にかけられた滑稽で無力なイエス像であった。しかし最後、与蔵に声をかけられたとき、侍はふりかえって大きくなつた。「あの方」は死を前にした侍に「お供」なさるのであった。「エマオの旅人」であれ、傍らをあるいている「第三の人」であれ、また侍にお供する「あの方」であれ、いずれも「同伴者」としての存在であることがわかる。

したがって、『深い河』においては、神、あるいはイエスとは何者なのかという課題を、人間の個の内面——『深い河』では主にイエスと無縁であった美津子を中心にしたが一

——理解させるために、イザヤ書五十三章の言葉を用いたと考えられる。それがまさに、無力であるけれど同伴者として人間に内面化されている存在といえよう。

5. 結び

今日、キリスト教の中心的象徴としてのイエスのあるべき姿をどのように語ったら、われわれが理解できるだろうか。つまり、現代において、キリスト者がイエスのことを人々に伝えようとするならば、それについてどう語ることができるのか。『深い河』は、これらの問いに答えを与えているといえよう。『深い河』においては、神、あるいはイエスのあるべき姿を語る方法として、イザヤ書五十三章と道化のコンセプトが用いたと思う。

つまり『深い河』では、登場人物たちがそれぞれ抱えていた様々な苦しみ——その苦しみとは空虚感であり、孤独であり、罪の意識として表わされているが——を慰め、癒してくれる存在を求めていた。そうだとすれば、この世に生きるキリスト者は、いかにして彼らにイエスのあるべき姿を語り、イエスにある希望を代弁しうるのだろうか。まさにそこに、彼らの「神とのかかわりの根拠と出発点」があると考えられる。

論文中に引用した遠藤周作の小説は『遠藤周作文学全集』(全一五巻、新潮社、一九九九年—二〇〇〇年)に拠った。

【注】

- (1) 遠藤周作、加賀乙彦「〈対談〉最新作『深い河』—魂の問題—」『國文学 解釈と教材の研究〈特集〉遠藤周作—グローバルな認識』学燈社、一九九三年、九月、六頁。
- (2) J・ペリカン『文化史の中のイエス—世紀を通じての彼の位置—』小田垣雅也訳、新地書房、一九九一年、一二六頁。
- (3) 『聖書 新共同訳』三省堂、一九八七年、二六五頁。
- (4) 前掲書、一五—一六頁。
- (5) L・コラコフスキー『責任と歴史—知識人とマルクス主義』小森潔・吉田耕作訳、勁草書房、一九六七年、二九六頁。
- (6) ハーヴィー・コックス『愚者の饗宴「遊び」と「祭り」の神学』新教出版社、一九七一年、二—四頁。
- (7) コックスは著書『愚者の饗宴「遊び」と「祭り」の神学』で、ルオーは、サーカスの小さな世界とフランス・カトリックの伝統の両方に対する彼の深い感情を描いて、この一致を明らかにした恐らく近代の最初の人物であると評価する。
- (8) コックスは、サーカスの行進の道化のように、キリストは自分が地上の権力を持たない時に、王の行列で満ちた町にははいつて行って、既存の権威を皮肉った。旅芸人のように、彼はよく食事やパーティに顔を出した。最後に、彼は敵によって、王の衣装をつけた嘲りのおどけた姿に装われた。彼のおかしな要求を風刺する彼の頭上の徴をくすくす笑い、嘲弄する者の中で、彼は十字架につけられた、と道化としてのキリストに触れている。
- (9) 柳宗玄「〈座談会〉ルオーのピエロをめぐる」『ルオー礼讃』鈴木治雄、岩波書店、一九九八年、一八二頁。
- (10) 遠藤周作「ルオーの中のイエス」『全集第十三巻 評論・エッセイⅡ』新潮社、二〇〇〇年、一五八—一五九頁。
- (11) 岩田靖夫「他者のことば—根源への回帰」『他者との出会い』宮本久雄、金泰昌編、東京大学出版会、二〇〇七年、二一六—二一七頁。